

ボランティアが集合

3) 配付結果はチーフが集計し、翌日メーリングリストに報告

(2002 年度の介入プログラム)

プログラムのラインナップそのものは昨年度と変わるところがないが、前述のようにアウトリーチ体制が整備されたため、アウトリーチを必要とする Condom 大作戦やニュースレター配布が大きな進展を見た。

(ニュースレター)

SWITCH などの介入プログラムによって、MASH 大阪は参加したクライアントたちに関わるさまざまな情報を得る。その中には、検査項目における陽性率、Condom 使用へのイメージなど、直接クライアントに還元すべき情報も多く含まれている。このような情報を迅速かつ効率良くクライアント・コミュニティに還元するツールとして、ニュースレターの発行は MASH 大阪立ち上げ当初から優先課題として認識されていた。しかしながら編集に関わる人材の不足、研究費運用の不都合から、2002 年度半ばまでは年 2-3 回のみの発行にとどまっていた。3 年に渡る SWITCH のプログラムがいったん終了した 2002 年秋、SWITCH を通じて得た情報をクライアント・コミュニティに還元することを最優先の課題とするコンセンサスが生まれ、編集体制を整備する取り組みが始まった。その結果、2002 年 12 月にサマースイッチの報告を主な内容とする <SAL+> ゼロ号が完成、以後毎月 1 回の発行を行っている。このニュースレター発行および前述の Condom 大作戦を含む予防プログラムの概要と実績を以下に述べる。

1. コミュニティ・レベル

1) Condom 大作戦 part2

2000 年まで執行した Condom 大作戦 part1 において、啓発資材は

- Condom

- セーフターセックス・リーフレット

- STD 勉強会案内

- JHC 電話相談案内

をワンセットにしたものであった。

しかし同プログラムは、配付量が限られていたことと、さまざまな方向性をもつ複数のメッセージが同居しており、飽きられやすい、という難点があった。

そこでプログラムの抜本的な見直しを計り、新たに <Condom 大作戦 part2> を立ち上げた。

その骨子は以下の通り:

(1) 目的

- Condom へのアクセスを向上させる

- イメージを変える: 避妊から予防へ

- バー・コミュニティとの関係を深める

(2) 啓発資材

- Condom と潤滑剤(アナルセックスの必須アイテム)をワンセットにしたもの

- 啓発色を極力抑え、持ち運びやすさを優先

- メーカーと共同開発

(3) 配付方法

- Condom ・ディスペンサーによる、バー(あわせて約 130 軒)での Take Free

- ゴムっ子による、街頭およびイベント会場での手渡し配付

(4) アウトリーチの手順

- ①企画書の配付(堂山 150 軒、ミナミ 50 軒)

- ②電話による協力の要請(約 6 割のバーから協力を得た)

- ③ディスペンサーおよび Condom キットの配付(2 人 1 組で 1 時間に 15 軒配布)

- ④Condom の補充(月 1 回、50-100 個ずつ。堂山では 6 人が 1 時間で補充完了。ミナミでは 4 人で 1 時間弱。)

(5) 配付実績(表-1~3)

表-1 ディスペンサー関連:ミナミ

期間	バーの数 (軒)	配付した Condom キット数 (個)	働いたボランティアのべ数 (名)
初回配布 2002 年 6 月 27 日~7 月 18 日	31	3130	8
7 月	26	1560	5
9 月	22	1110	4
10 月		950	5
12 月		2150	7
2003 年 1 月		1260	4
2003 年 2 月	19	1050	5
2003 年 3 月	24	1360	5
合計		12570	43

表-2 ディispenser関連:堂山

期間	バーの数 (軒)	配付したコンドームキット数 (個)	働いたボランティアのべ数 (名)
初回配布 2002年 7月9日~18日	83	8500	10
8月	75	4400	14
9月	80	4020	13
10月	69	4050	11
11月	6	500	5
12月	87	6220	10
2003年1月	73	4300	5
2003年2月	68	3800	4
2003年3月	77	3300	3
合計		39090	75

表-3 ゴムっ子関連

期間	配付箇所	配付したコンドームキット数 (個)	働いたボランティアのべ数 (名)
2002年3月	4	244	7
4月	1	100	3
5~7月	4	約3,000	約20
8月		227	11
9月	3	200	3
11月	2	88	5
12月	5	941	17
2003年1月	2	187	8
2003年2月	1	100	4
2003年3月	4	350	16
合計	26	約5450	約93

以上、まとめると

2002年3月 ~2003年3月	配付総数 約57110個	働いたボランティア のべ約216名
---------------------	-----------------	----------------------

2) ニュースレター<SAL+>

(1) 目的

- コミュニティに向けての情報発信のツールとする
- コミュニティからの情報を事業にフィードバックさせるツールとする
- コミュニティ・ペーパー的な性格を持たせ、コミュニティ活性化につなげる

(2) アウトリーチの手順

第2木曜日7時半に集合。8時より、MASH大阪協力店すべてに配付。(堂山、ミナミ合わせて約200軒)。バー1軒あたり25部ずつ配付。クラブ、ショップなどは100部程度配布。

6人集まれば堂山で1時間以内、ミナミは2人で配付可能。2003年1月からゴムっ子も配付

(3) 配付実績(表4, 5)

3) 梅毒啓発葉<梅毒、あなど難しね...>

SWITCH2000~2002の結果、受検者の4分の1がかつて梅毒に罹患したことがあり、10人にひとりが必要治療と分かった。この事実をクライアント・コミュニティに還元するツールのひとつとして2002年8月に作成、以来大阪のみならず東京、福岡などあわせて約9500部がこれまでに配付されている。

表-4 <mash-osaka newsletter>

期日	配付店舗数 (軒)	配付したニュースレター数 (部)	ボランティアのべ数 (名)	備考
2002年6月	約200	約2000	約10	ゴールデン・スイッチ号
2002年7月	約200	約2000	約10	サマー・スイッチ案内
2002年9月	約200	約2000	約10	サマー・スイッチ報告

表5 <SAL+>

期間	配付店舗数 (軒)	配付したニュースレター数 (部)	ボランティアのべ数 (名)
2002年12月	182	4500	10
2003年1月	約190	5500	10
2003年2月	177	5700	10
2003年3月	171	5625	9

2. グループレベル

1) basement[g]

イベント自体は関連介入プログラムと考えられるが、トーク部分はグループレベルの介入プログラムに相当する。

2000年8月に発足して以来、ほぼ同一のスタッフによって運営されてきた。セーフターセックスに関わるトークを含む質の高いクラブパーティとして定着していたが、スタッフの減少、それによる疲労が顕在化したため、8月でいったん休止することとなった。休止から半年を経過した現在、basement[g]を復活させたいという声がコミュニティから上がり始めており、相当のニ

ーズがあることが示唆されている(表-6)。

2) STI 勉強会

前年度から引き継いだ大阪府との共催による STI 勉強会を2002年4月でひとまず終了。その後プログラム内容を再度検討し、2003年1月から、医師を交えたベーシックな情報伝達を目的とする勉強会<Intro>を発足させた(これも大阪府との共催事業)(表-7)。

表-6

期日	有料入場者数 (名)	備考
2002年3月	119	コンドーム・キット配布あり
2002年4月	99	"
2002年5月	155	"
2002年6月	84	"
2002年7月	105	"
2002年8月	152	"
合計	714	月平均119名

表-7

期日	形態	参加者数 (名)	備考
2002年3月	ワークショップ型	2	3回シリーズの3回目。大阪府との共催
2002年4月	トークカフェ型	8	テーマ:HIV抗体検査。大阪府との共催
2003年1月	情報伝達型	2	大阪府との共催
2003年2月	情報伝達型	9	大阪府との共催

3. 複合レベルの介入プログラム

SWITCH2002 ⇒次章を参照。

II. SWITCH2000～2002の総括

(はじめに)

1. 目的

SWITCHは

- 1) 性的健康の自己管理への促し
- 2) 陰性者に向けた予防介入プログラムの提供
- 3) 陽性者への第2次予防
- 4) パートナーシップによる臨時検査イベントのモデル構築

を目的とし、コミュニティ・レベル、グループ・レベルのみならず個人レベルでの予防介入プログラムを含む複合レベルの予防・検査イベントとして構想された。その背景としては、大阪地区において

- 保健所での無料匿名検査はウイークデイの午前中のみアクセス可能
- 無料匿名の夜間検査は週2時間のみ、かつコミュニティから遠く、アクセスが良好とはいえないの2点があげられる。大阪のMSMにとって、HIV/STI抗体検査は必ずしも「受けたいときに受けられる」状態にはなかったのである。

2. コミュニティ・イベントとしての SWITCH

「性的健康の自己管理への促し」をできるだけ多くのクライアントにおいて達成するための装置として、さまざまなコミュニティ・イベントが計画された。これは、クライアントを引き寄せるためにはイベント(=お祭り)を組織するのが最も効果的、という考え方に基づいている。

3. モデル事業

ボランティア・セクター、疫学研究者、行政の三者間のパートナーシップによって提供されるプログラムであることから、既存の検査プログラムに捕らわれない、できる限りクライアントのニーズにそった形でのプログラム提供が構想された。その骨子は次の2点。

- 若年層の MSM を引きつけるため、コミュニティ・イベントを導入し「ついでに受ける」「皆でいっしょに受ける」雰囲気をつくること
- クライアントのニーズに可能な限り応えるような検査体制を構築すること

(実施に至る流れ)

場の設定、広報、検査事業の準備、ボランティア・リクルートが事業の主な柱であった。実施に至るまでにさまざまなセクターとの連携が必要となった。(表-8)

1. 会場の設定

- 1)会場の選択・設営⇒大阪市と協働(2002年)

- 2)巡回診療の届け出⇒大阪市・民間の診療所と連携

2. 広報

- 1)地域への広報・・・ポスター・パンフレット⇒コミュニティと連携
- 2)国への広報・・・⇒ゲイ・メディアと連携

3. 検査事業の準備

- 1)会場の設営
- 2)受付・ガイダンス
- 3)予防相談
- 4)IC と採血⇒医療専門職ボランティアと連携
- 5)告知とカウンセリング⇒医療専門職ボランティアと連携
- 6)医療機関の紹介⇒医療専門職ボランティアと連携
- 7)検査体制の構築⇒検査機関(公的機関・業者)および研究班と連携
- 8)予防プログラムの展示
- 9)フォローアップ電話相談⇒他の NGO と連携

以上で述べた連携を投入された社会資源と捉えたうえでまとめたものが表-8である。

4. ボランティア・リクルート

検査事業に関わるボランティア・リクルートおよびアサインメント(表-9)。

表-8

資源の種類	対応するプログラム
パートナーシップから生まれたもの	● イベント全体の立案・準備 ● アンケートの作成・集計と結果の還元
コミュニティ内の資源	● 地域への広報 ● 全国への広報 ● 会場の設営 ● 受付・ガイダンス ● 予防相談 ● 予防プログラムの展示
市民社会内への資源	● IC と採血 ● 告知とカウンセリング ● 検査体制の構築(一部) ● フォローアップ電話相談
行政のもつ資源	● 地域社会へにおける事業全体の位置付け ● 会場の選択・設営 ● 巡回診療の届出 ● 健康相談
企業のもつ資源	● 検査体制の構築(一部)

表-9

【仕事】	【ジェンダー】	【セクシュアリティ】	【サービスの種類】	【経験】
会場設営	問われず	問われず		問われず
受付/ガイダンス/会場案内	男	ゲイ	ピア的	問われず
予防相談	男⇒選択可能	ゲイ⇒選択可能	ピア的	研修が条件
健康相談(保健師)	問われず	問われず	プロ的	問われた
採血/I.C.(看護師)	問われず	問われず	プロ的	問われた
血液検査(検査技師)	問われず	問われず	プロ的	問われた
結果告知(医師)	問われず	問われず	プロ的	問われた
カウンセリング	問われず	問われず	プロ的	問われた
フォローアップ電話相談	問われず	問われず	ピア的	問われた

(実施手順)

■採血会場にて

1.検査プログラム

1)受検者受付:受検受付記録、受検者用ファイルの配布、翌日受け取れることの確認

受検者用ファイルの内容:

- ・ナンバーシールを貼った結果引換証/結果引換証モギリ
- ・ナンバーシールを貼ったアンケート/リスクアセスメント・シート(以下アンケート票)
- ・残りのナンバーシール(3枚)

☆ ナンバーシールの内訳

(※はクライアントが持って回るもの)

- 1:受付(そこで張る)
 - 2:アンケート票(すでに張ってある)※
 - 3:注射器(そこで張る)
 - 4:スピッツ(そこで張る)
 - 5:結果引換証(すでに張ってある)※
 - 6:結果引換証モギリ(すでに張ってある)※
 - 7:結果票封筒(すでに張ってある)
 - 8:結果予約受け付け(そこで張る)
- 2)ガイダンス(5ブース):紙芝居・1枚紙手渡し
- 3)アンケート票記入:プライバシーを保証提出の同意後、回収箱に受検者が直接入れる
- 4)採血
インフォームド・コンセント
ナンバーシールを結果引換え証のナンバーと照合したうえで検体用スピッツおよび注射器に貼る採血
- 5)結果お知らせの予約
会場・受取日・時間のお知らせと予約受検者用ファイルの回収
- 6)おみやげセットの手渡し
セットの中身
(1)コンドーム、(2)梅毒啓発しおり、(3)梅毒予防小冊子、(4)大阪府制作の手帖型予防パンフ、(5)小梅ちゃん
- 7)利用者アンケート
- 8)検体のまとめと検査への引き渡し
血液検体搬送:専門の業者へ委託、検体整理、結果記録票、血清分離および血清分注、台風などの場合の措置

2.予防プログラム:受検受付前、採血前、採血後のアクセスを保証(Summer SWITCH2002

のみ)

1)ボランティアによる HIV/STI 予防相談

受検行動の受けとめ

不安の受けとめ

リスク行動の振り返り

結果受け取りの促し

感染してもできるセーファーセックスをめぐる相談

2)保健師による健康相談

専門職として HIV/STI 予防を含めた健康相談一般に関わるクライアントのニーズに対応する

3)コンドームのブース展示

<JUST FIT CONDOM>展示

(0) ノーマル系 タイトルなし

(1) サイズ系 タイトル「JUST FIT」

(2) 匂いつき、ゴム臭カット系 タイトル「ゴムくさいのやだ」

(3) メントール、イボイボ等刺激系タイトル「さらに熱い:夜、刺激 SUMMER!」

(4) 簡単装着系 タイトル「使いやすい」

(5) 変わり種、キワモノ系、その他

4)梅毒予防を呼びかけるスライド・ショー

<梅毒って倍毒!?/BYE BYE 梅毒>

梅毒をめぐる一般情報

特にオーラルセックスと梅毒感染

HIV 感染との関係

受検の大切さ

小冊子を作成し配付

5)地域の情報の展示((パネルほかによる)

目的は大阪地区の MSM の状況を浮き彫りにすること

地域における性感染症の発生動向(HIV、梅毒、B型肝炎、クラミジア)

地域の検査機会

SWITCH のデータを展示し、一般集団との違いを浮き彫りにする

6)感染者の生活・感染後のセックスをめぐる展示

感染者の受けられる公的サービス

HIV 診療の現状

服薬の状況

薬剤耐性ウイルスの出現

■検査(業者、大阪府公衆衛生研究所、神奈川県立公衆衛生研究所にて。検査主体は厚生労働省 HIV 検査法・検査体制研究班)

1.検査実施:当日中に業者委託による HBV

検査および梅毒検査、翌日に HIV 抗体・確認検査の体制

○HIV 検査

HIV 抗体スクリーニング検査(ダイヤスクリン、PA 法)
陽性検体 → WB 法確認検査

○HBV 検査

HBs 抗原検査
HBs 抗体検査(PA 法)

○梅毒検査

TPHA 検査
RPR 検査

○検査結果の整理

結果記録票への記入(結果報告施設名称・印は大
國診療所・厚生労働省 HIV 社会疫学研究班)

2.結果の搬送:お知らせ会場へ

3.最終日、血液検体の移送と保存

■検査結果お知らせ会場(山西福祉記念会館)

1)受付・待合:結果引換え証の記録

2)告知医師の振り分け

3)結果の告知

受検者番号の確認(結果お知らせ票と引換え証の照
合)

結果お知らせ

カウンセリング

医療機関紹介

ソーシャルワーカー紹介

HIV/STI 予防相談紹介

陰性者へのリーフレット<HIV に感染するということ
>の手渡し

4)予防プログラムの展示(既出)

■電話相談

1)問い合わせの電話受付:緊急連絡網で対応

2)検査結果に関する相談:他の NPO と協働

(3年の期間中に導入された変化)

1.目的の変容

なるべく多くのクライアントに性的健康の自己管理を促すため企画された SWITCH だったが、2 年目で早くも受験者が 400 名に達し、検査体制のキャパシティの関係上、これ以上拡大政策を取り続けることが困難となった。(表-10 参照のこと)そこで 2002 年はゴールデン・ウィークと 8 月の 2 期に分割し、ゴールデン・ウィークは昨年から継続するニーズに応えるもの、8 月は大阪市北保健センターとの協働モデルを追求するもの、との目的設定を行った。

2.アンケートと告知の連結

採血前のアンケート調査(属性 / 知識 / 行動を問うもの)は当初、独立して集計されていたが、2002 年に至り、検査結果の告知と連結され、告知を担当する医師は、受験者直筆のアンケート調査票を参照しながら告知および予防介入を行うことができるようになった。同時に、受験者の HIV/STI ステータス別にアンケートを分析することが可能になった。

3. ガイドンスの導入

2001 年から、主催者側がすべての受験者に対して伝えるべき情報を整理したガイドンスが導入された。

4. ソーシャルワーカーの導入

陽性者のニーズに応えるため、2002 年にソーシャルワーカーが新たに導入された。

表-10 (SWITCH の結果)

	主なコミュニティ・イベント	コミュニティイベント参加者	随時検査受検者	採血実施日	告知実施日
2000	●美術展 ●講習会 ●勉強会 ●クラブ・パーティ	約 1050 名	249 名	祝日 3 日間	祝日 3 日間
2001	●コンドーム・パッケージ展 ●講習会 ●勉強会 ●ライブ・コンサート ●フリーマーケット ●カフェ ●クラブ・パーティ	約 2000 名	397 名	祝日 3 日間	祝日 3 日間
2002 Golden	●フリーマーケット ●カフェ ●クラブ・パーティ	約 580 名	150 名	祝日 1 日	祝日 2 日間
2002 Summer	●夜祭り ●フリーマーケット ●玄人名人会 ●ライブ・コンサート ●クラブ・パーティ	約 1800 名	152 名	金曜日 4 回	土曜日 4 回

(考察)

1. SWITCH はその立案当初から次のような点に配慮した検査体制の構築をめざした:

1) できるだけ多くのクライアントに受検機会を提供するために

- コミュニティに近い、しかし近すぎない立地が確保されているか
- 若年層の MSM にアピールするイベントになっているか
- 受検しやすい時間帯になっているか
- 短期間に完結するイベントになっているか

2) クライアントのニーズに可能な限り応えるような検査体制を構築するために

受検プロセスの中で、ガイダンス、インフォームド・コンセント、リスクアセスメントに基づく予防行動の促進、不安の受けとめや軽減、新しい知識や情報の提供、などの機能が果たせる体制ができているか

- 受験者の相談のニーズが拾い上げられる体制ができていますか
- 結果が陰性か陽性かの区別が他の人に分からないような告知のシステムができていますか
- 告知する保健医療専門職者が病態、治療、医療体制について熟知しているか、また、悪い知らせをするときや話しにくい内容(性行動など)について話しあう際に必要なスキルを持っているか
- 検査結果を知ることにより派生する、多様で深刻な心理社会的問題について対応できるか
- 陰性の結果告知の機会を予防介入の機会として活用しているか、そのために必要な知識・情報とスキルを担当者が持っているか
- 十分に時間の取れない場合のために、必要情報を盛り込んだ資料(パンフレットや後日の相談先のリストなど)を備えているか
- 出来るだけ多くの受験者に結果を返せる体制ができていますか

2. コミュニティ事業としての SWITCH

MASH 大阪が中心となって執行した SWITCH という事業には

- (1) 時検査・予防プログラムの立案・連携・執行
 - (2) コミュニティづくりのための事業の立案・執行
- のふたつの相異なるものが混在していた。(2)は MASH 大阪のミッションを越えるが、ミッションの遂行に必要であると認識された。このことは、MASH 大阪のモデルに当たるシドニーにおける MSM 介入事業

と比較すると理解できる。シドニーにおいては、予防介入事業がスタートしたとき、ゲイ・コミュニティにはすでに<ゲイ・プレス>というメディア、<マルディグラ>というお祭りそれにアドボカシー団体が機能しており、コミュニティが実体として機能していたと考えられる。いっぽう大阪では、バー同士のネットワークを構成する町内会もなければ、独自のメディアもお祭りもなく、コミュニティ・ネットワークが脆弱な状態に置かれていた。SWITCH を執行することで MASH 大阪は、お祭りとメディア(ニュースレターなど)を提供し、コミュニティが自分をそれと自覚していくプロセスに端緒を開いたと考えられる。

3. 情報の還元

予防プログラムとして SWITCH をみたとき、その最も大きな特徴のひとつは、

- (1) 告知医師(場合によってはカウンセラー、ソーシャルワーカーも)が受検者の HIV/STI ステータスを知ることになる。
- (2) 主催者がコミュニティ内での発生動向を知ることになることであり、この2点は予防介入を実施する際の有効なリソースとなりうる。ただそのためには、守秘義務に関してコミュニティから全幅の信頼を得ることが条件となる。

上記の還元のプロセスを図式化したものが図-1 である。

4. コミュニティからの反応

- 臨時検査……………高く評価、存続を強く望む(利用者アンケート、事後、MASH 大阪がバーのマスターを対象に行ったアンケートなどから)
- コミュニティ・イベント…地域活性化の一方法として評価、一部運営のまずさを指摘、地域の町内会からも評価

5. コミュニティの活性化

一般にコミュニティの成立要件として

- 居住性 ● 地域性 ● 帰属意識
- ネットワーク ● 解決すべき問題の共有
- お祭りの共有

があげられる。このうち堂山やミナミにみられたのは地域性とゆるやかなネットワークのみであり、コミュニティとしての基盤は決して強固なものとは言えなかった。

そこへ SWITCH は解決すべき問題として大阪の MSM における性的健康が危機に瀕していることを訴え、同時にお祭りを持ち込んだ。このことによって

堂山やミナミのパー・コミュニティはより実体としてのコミュニティに一步近づいたわけで、その意味でSWITCHはコミュニティの活性化に寄与したといえるだろう。

6. SWITCHから学んだこと

- 1) パートナーシップが質の高いサービスにつながった
- 2) クライアント・センターな臨時検査には大きなニーズ

のあることが確認された

- 3) 予防プログラムの効果評価は今後の課題である
- 4) コミュニティ形成に寄与した
- 5) キャパシティ、コスト、市民ボランティアによる予防相談など、臨時検査の限界が明らかになった。

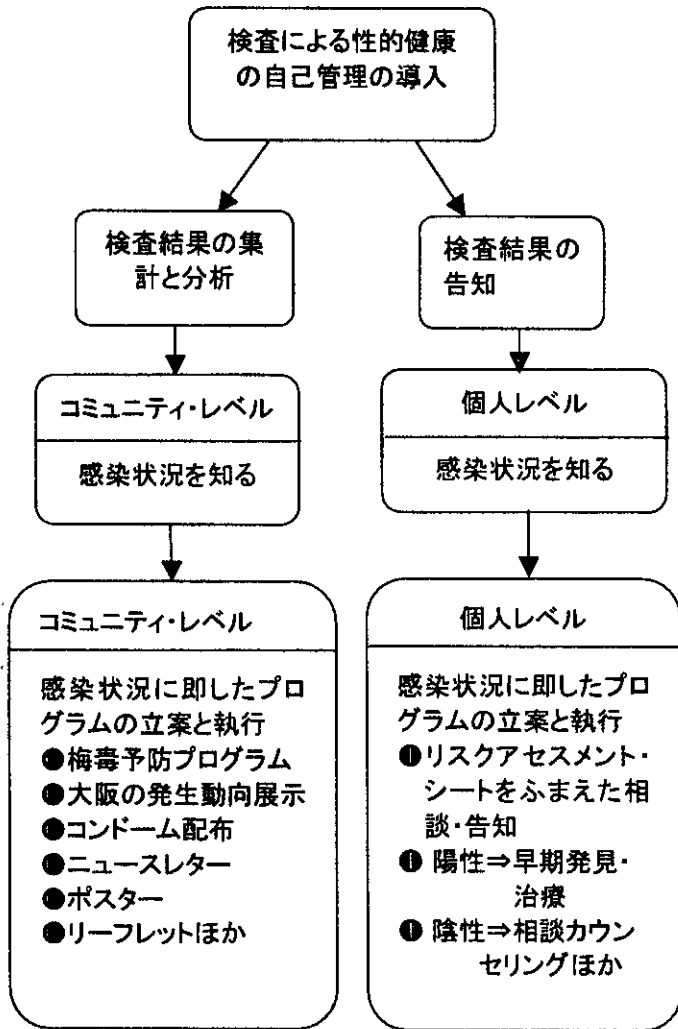


図-1 検査結果の還元モデル

Ⅲ. MASH 大阪 3 年間の事業のまとめ

(はじめに)

大阪地区の MSM における性的健康を向上させる目的で設立されたプロジェクト<MASH 大阪>の 1998 年～2002 年の事業を、クライアント・コミュニティにフォーカスしつつ振り返り、ボランティア・ベースの予防介入プログラムのモデル提示を試みる。

(マルチセクター・プロジェクトの立ち上げ:1998 年度)

●目的:堂山・ミナミに集まる MSM における性的健

康の向上/HIV/STI 予防介入事業の推進

●対象:大阪の MSM。直接には堂山・ミナミの商業施設を利用する若年層/ネット上でアクセスする若年層 MSM

●手法:ニーズ・アセスメント→プログラムの立案→執行→効果評価→コミュニティへの還元

●スタイル:セックスを肯定的に捉え/啓発色を抑え、メッセージをエンタテイメント色でくるんで以上のような MASH 大阪のコンセプトを図-2 に掲げる。

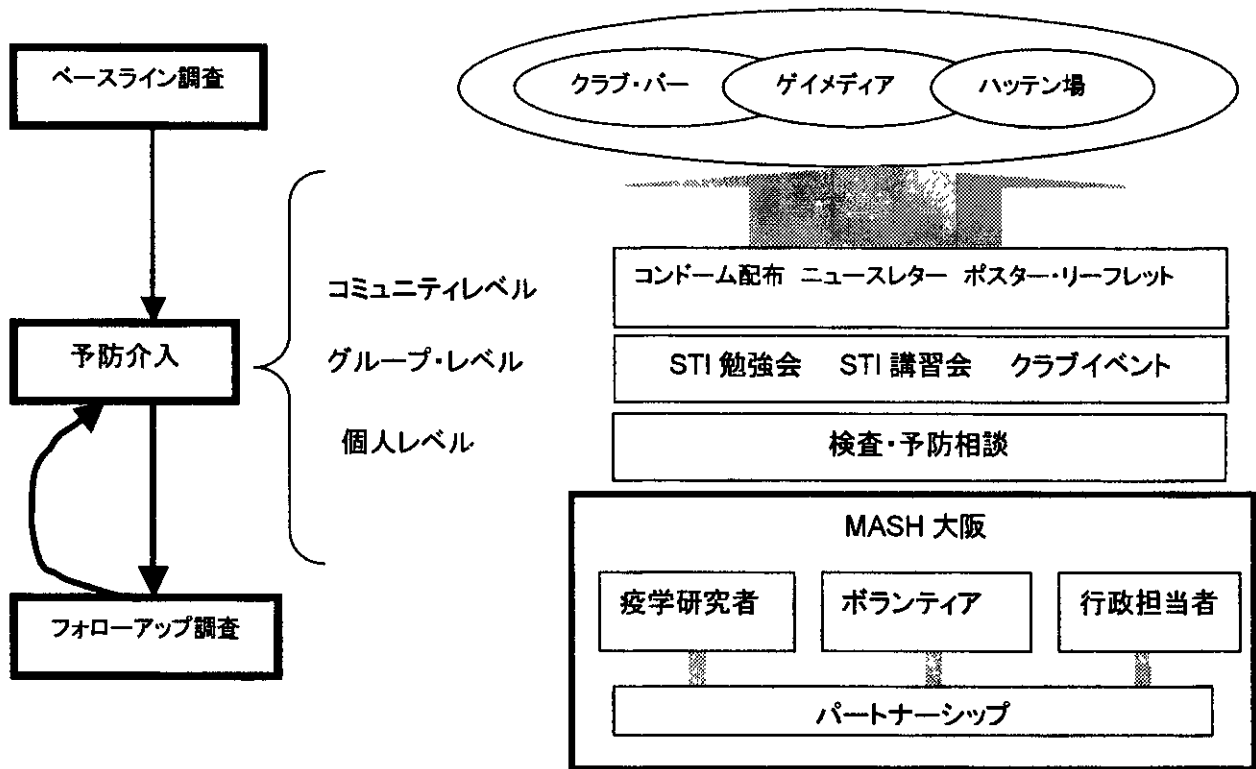


図-2 MASH 大阪の概念図

(対象コミュニティ)

1. コミュニティの定義

広義:大阪の MSM の総体

狭義:堂山・ミナミ地区のゲイ向け商業施設で働く人々および顧客の総体

ゆるい地縁的ネットワークがみられる

- ・働く人たちのあいだのネットワーク
- ・働く人々と顧客とのあいだのネットワーク
- ・但し意識化されにくい

2. <コミュニティ>の規模

大阪に MSM はどれくらいいるか?

- 平均をとれば・・・3 万～5 万人
- 大都市集中傾向を考慮すると・・・この数倍に

3. 大阪のゲイ向け商業施設 (概数)

- 堂山:バー (150 軒)、ハッテン場 (11 軒)、ショップ (5 軒)
- ミナミ:バー (50 軒)、ハッテン場 (5 軒)、ショップ 3 軒
- 新世界:バー (30 軒)、ハッテン場 (3 軒)

4. ニーズ・アセスメント: ベースライン調査 (1999 年度) の結果と介入モデルの設定 (表-11)
1998 年度、バーのオーナー、マスターを対象とした HIV/STI 講習会の開催、ポスターの配付など

を執行したが、1999 年度に我が国初めての MSM 対象のベースライン調査を行い、その結果に基づいてニーズの査定と介入モデルの設定を行った。

表-11

ベースライン調査(1999 年度)の結果	介入モデル	
●バー利用者の 24~40%がハッテン場を利用 ●60%がインターネットを利用	どこで?	★バー・クラブで ★ハッテン場で ★インターネットで
●20~24 歳 38% 24~29 歳 34% ●感染不安あり 45%、感染者を知っている 18%、エイズに関心 79% ●感染不安がない・感染者との交流がない・エイズへの関心が不明瞭な者が HIV 受検率が低く、夜間検査場所の認知率が低い	誰に?	★堂山・ミナミに集まる若年層の MSM に ★とりわけ HIV/STI に関する情報を忌避する層に
●延命治療が可能/STI 発症と HIV 感染の関連において正答率が低い ●アナルセックスで必ずコンドーム使用 40~59% ●コンドーム使用への印象: 良い+何も感じない 86% ●MASH 大阪の認知率 19% ●夜間検査機関の認知率 30%	何を?	★早期検査・早期治療のメリット ★STI 発症と HIV 感染の関連 ★セーフターセックスに関する情報 ★コンドームのイメージアップ ★検査に関する情報
●感染不安がない・感染者との交流がない・エイズへの関心が不明瞭な者が HIV 受検率が低く、夜間検査場所の認知率が低い	どう?	★コミュニティ/グループ/個人の 3 レベルを使い分けて ★メッセージをエンタテイメント色でくるんで

(プログラムの立案と執行: 2000 年度~2002 年度)

1. コミュニティ・レベル

1) 講習会

バー、サウナ、ハッテン場のオーナー、マスターを対象とした啓発プログラム。大阪府との共催事業として開催した (表-12)。

表-12

期日	テーマ	参加者数	備考
2000 年 5 月	HIV 治療の現状と福祉	6 名	
2001 年 5 月	梅毒と HIV 感染	1 名	大阪市北保健センターで開催

2) 啓発資材の制作と配付: ポスター、リーフレットなど次の 3 点に配慮しつつ資材の開発を行った:

- 置かれる場所のアセスメントを行い、サイズやスタイルに反映させる
- セックスを肯定的に捉える

●啓発色を極力抑え、インパクトのあるものをめざす

啓発ポスターの配付実績は以下の通り (表-13)

表-13

配付期間	配付資材の種類	配付数	働いたボランティア数
2000 年度	ポスター「つけてやろうぜ」	17 部	のべ 9 名
2000 年度	ポスター「必着」	14 部	のべ 6 名

3) コンドーム配付: コンドーム大作戦 part1~part2
このプログラムは 2001 年度に大きな方向転換

を行った。それまでセーフターセックスを浸透させるための資材として配付されたセーフターセ

ックス・キットに代わり、コンドーム使用の普及を目的とするコンドーム・キットをメーカーと共同開発し、配付の方法にも工夫を凝らした（表

-14)。その結果、堂山・ミナミ地区のバーの6割以上の店舗でコンドームが入手できる環境を創出した（表-15）。

表-14

	Part1	Part2
目的	●コンドームのイメージアップ ●セーフターセックスの普及 ●勉強会/電話相談の広報	●コンドーム・アクセスの向上 ●イメージ転換:避妊から予防へ
資材	●セーフターセックス・キット ▼コンドーム ▼セーフターセックス・リーフレット ▼STD 勉強会案内 ▼JHC 電話相談案内 ▼サイズ:10×6×1cm	●コンドーム・キット ▼コンドーム ▼潤滑剤 ▼サイズ:5×5×0.5cm
配付方法	●イベントでの手渡し	●バーにディスペンサーの設置依頼 ⇒毎月1回の補充 ●ゴムっ子による手渡し
配付目標	定めず	●単年度で5万個配布

3年間の配付実績は以下の通り（表-15）。

表-15

配付期間	配付資材の種類	配付数	配付した日数	備考
2000年度	セーフターセックス・キット	2348個	19日	
2001年度	コンドーム・キット	588個	4日	
2002年度	コンドーム・キット	約55500個	27～30日	ディスペンサー関連50300個 ゴムっ子関連約5200個

4) ニュースレター

2000度の早い段階でアウトリーチ体制が整備されたのをふまえ、編集体制を整備、毎月発行の体制を構築しつつある。<SAL+>の目的は、前述のように

- コミュニティに向けての情報発信のツールとする
- コミュニティからの情報を事業にフィードバ

ックさせるツールとする

- コミュニティ・ペーパー的な性格を持たせ、コミュニティ活性化につなげるの3つである。<SAL+>が順調に展開できれば、MASH大阪はようやくコミュニティへの定期的な情報発信ツールを持つことになる。3年間の配付実績は以下の通り（表-16）。

表-16

期間	名称	配付店舗数	配付したニュースレター数	備考
2000年	準備号 NO.1 準備号 NO.2		準備号 NO.1 250部 準備号 NO.2 500部	SWITCH2000会場で配付 フォローアップ調査会場で配付
2001年	準備号第1号	約200軒	準備号第1号 400部 2000部	SWITCH2001会場で配付 SWITCH2001報告と梅毒予防
2002年 6～9月	mash-osaka newsletter	約200軒	2000部×3回	約30名
2002年 12月～ 2003年 3月	SAL+	約180軒	毎月約5500部	毎月約10名

5) 臨時検査イベントでの展示プログラム (2002 サマースイッチ@北保健センター)

- コンドーム展示
- 梅毒啓発ビデオ
- 大阪の発生動向
- 感染者からのメッセージ

2. グループ・レベル

1) STD (STI) 勉強会

HIV/STD についての啓発のニーズに応えることを目的とし、グループダイナミクスを利用した直接介入のプログラム。手法としては次の3パターンがこれまで執行されている：

- 情報伝達型：STDに関する、医師を交えての情報交換の場（1999年度）
- ワークショップ型：ファシリテーターを養成し、グループ・ダイナミクスを利用（2000～2001年度）
- カフェ型：ゲストスピーカーのトークを核としたプログラム（2001年12月～2002年4月）

3年間の実績は以下の通り（表-17）：2000年度は順調に推移したが、2001年度途中から参加者の減少、ファシリテーターの不足が目立ち始めた。これを契機にニーズの見直しをはかり、2002年度後半から、医師を交えたベーシックな情報伝達型の勉強会を提供している。

表-17

実施期間	実施回数 (回)	参加者総数 (名)	一回あたりの 平均参加者数 (名)	備考
2000年度	15	225	9	
2001年度	13	98	7.5	情報伝達型7回、トークカフェ3回、ワークショップ2回
2002年度	3	19	6.3	トークカフェ1回、ワークショップ1回情報伝達型2回

2) クラブパーティ basement[g]（2000年8月～2002年8月）

イベント自体はコミュニティの活性化をめざした関連介入プログラムといえるが、安全なセックスをめぐるトークとMCの部分はグループレベル

の直接介入プログラムとみなすことができる。スタッフ不足により2002年8月にいったん終了したが、2003年度中に大阪市との協働事業として再開の予定。これまでの開催実績は以下の通り（表-18）。

表-18

実施期間	実施回数 (回)	有料入場者 総数(名)	一回あたりの 平均入場者 数(名)	備考
2000年度	8	1107	138	
2001年度	12	1526	127	セーフターセックス・キット、ステッカーを配付
2002年度	5	595	119	コンドームキットを配付

3. 個人レベル：SWITCHにおけるプログラム

- 1) 医師・カウンセラーによる予防・ケア相談
 - 2) ボランティアによる予防相談
 - 3) 保健師による健康相談(大阪府・市との協働事業)
(プログラムの効果評価)
1. 効果評価のツール
- 1) フォローアップ第1次調査(2000年)；第2次調査(2001年)；第3次調査(2002年)
 - 2) 臨時検査イベント(SWITCH2000～2002)時のアンケート調査
 - 3) SWITCH 利用者アンケート(2001・2002年度；第3者評価)
 - 4) コンドーム大作戦ベースライン調査(2002年8月)及びフォローアップ第1次調査(2002年11～12月)
 - 5) サマースイッチ・アンケート調査(2002年9月)
 - 6) 街の声(コミュニティからの反応)

2. 結果や評価をコミュニティにどう還元するか？

- 1) プログラムの立案に反映させる
 - (1) コミュニティ内の梅毒感染動向をプログラムに反映(葉、展示プログラム、ニュースレター)
 - (2) 勉強会 / トークショウのテーマ設定
 - (3) SWITCH のプログラム立案に反映
- 2) ニュースレター・ホームページを通して直接返す・・・2002年度に本格的に着手(2000～2002年度 MASH 大阪の事業のまとめ：図-3)

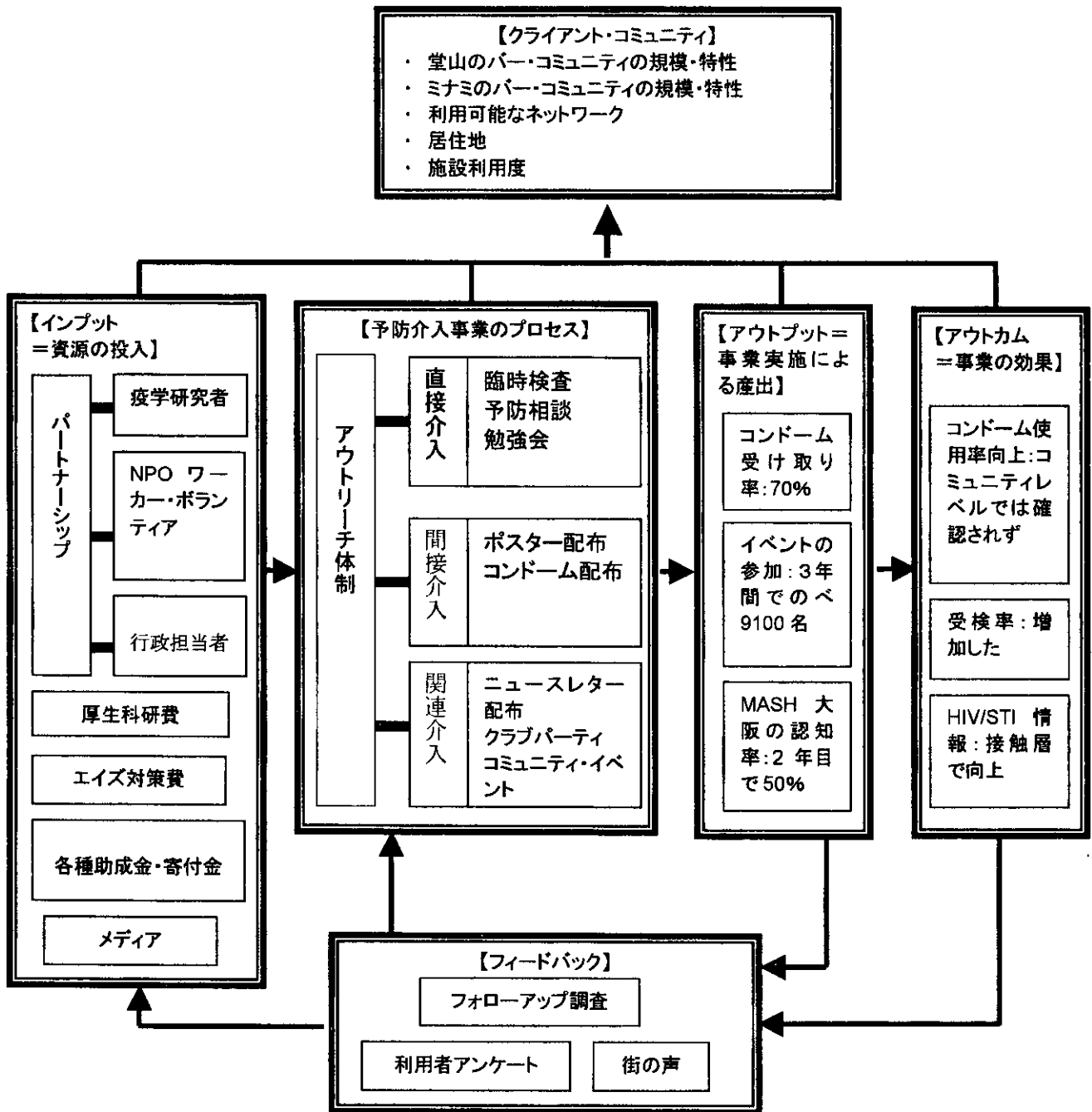


図-3

(2000～2002 年度終了時における MASH 大阪の自己評価)

1. コミュニティは MASH 大阪をどう見てきたか

- 臨時検査イベントを主催し、運営する団体
- 臨時検査イベントにあわせてコミュニティ・イベントを開催する団体
- コンドームを配付する団体 (2002 年以降)

「HIV/STI 予防介入事業を推進する団体」というイメージは希薄で、むしろ「自分たちために何かおもしろいこと、役に立つことをしている団体と感じ始めてい

る。

3 年間に渡る SWITCH の開催、さまざまな予防プログラムの執行、アウトリーチ体制の整備によって、コミュニティと MASH 大阪とのあいだにはようやく実質的な関係が生まれつつあるといえるだろう。

2. スムーズな事業展開の要因

- 1) パートナーシップによる質の高いサービスを提供した

- 2)啓発色(説教くささ)を極力抑え、同じ目線でユーモアのある語り口を採用した
- 3)コミュニティ事業を開催し、より多くのクライアントがコミュニティにアクセスできる環境をつくった

(MASH 大阪が経験した協働)

ボランティア・セクターと疫学研究者との協働はスムーズに展開した。その理由としては、ミッションが最初期から共有されたこと、またミッションを追求するためにはパートナーシップが不可欠との認識が早い段階で生まれたことがあげられる。互いに代替不可能な存在であることが理解されたわけである。いっぽう行政との協働はまだまだ発展途上といえる。ミッションの共有は困難ではないが、パートナーシップのあり方についての経験の蓄積がなく、試行錯誤があった。しかし大阪の MSM における性感染症の予防を達成するためには、ボランティア・セクターの持つ人的・方法的・ネットワーク的資源と行政の持つ財政的・政策的資源とをコーディネートする必要があることが双方によって理解されつつある。一般ボランティアと専門職ボランティアの協働は多くの議論と感情労働を生んだ。特に自己実現型ボランティアにおけるアイデンティティ(まとめ意識)がミッション追求とのあいだに矛盾を生じた場合、ミッションを遂行するためには専門職ボランティアとどう協働すべきかをめぐる冷静な判断の必要性が感じられた。

(今後の展開)

- 1.ハッテン場プロジェクト:ハッテン場を対象とした本格的な介入プログラム。ロッカールームにおけるポスターの貼り付けを主な内容とする。コンドームはハッテン場によって当然提供されるべきサービスであるとの認識から、コンドーム配布には慎重なスタンスを維持する。
- 2.ホームページ:ニュースレターのコンテンツを利用する。堂山やミナミに出ない、若年層の MSM を対象とする。
- 3.ドロップイン・センターの運営:カフェ、勉強会、一教室、講演会など、主に関連介入プログラムを執行し、コミュニティにおけるネットワークづくりに寄与する。
- 4.Basement[g]が大阪市との協働事業として復活の予定。

(中長期的課題)

これまでの予防介入事業の執行、とりわけ3年に渡る SWITCH の開催によって、これまで MASH 大阪による予防介入事業の対象集団として想定されていたにすぎないクライアント・コミュニティが、ある程度の輪郭とアイデンティティ(まとめ意識)をもつコミュニティとして立ち上がりつつある。コミュニティの活性化に寄与したわけだが、MASH 大阪のミッションであるコミュニティレベルでの性的健康の向上はまだまだ達成されていない。今後はコミュニティ/社会福祉理論の研究者とも協働しつつ、コミュニティの特性とニーズをより精確に把握したうえで予防プログラムを開発・執行していくことが求められている。

(研究発表)

論文発表

- 1.市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原 新、佐藤未光、井戸田一郎:MASH による啓発活動、総合臨床、50:2805-2810、2001

学会発表(シンポジウム)

- 1.厚生労働省 HIV 感染症の疫学研究班、MASH 大阪、MASH 東京、(財)エイズ予防財団:MSM における HIV/STD 感染とその予防に向けて、第 15 回日本エイズ学会総会サテライトシンポジウム、東京、2001.11.30
- 2.Garrett Prestage(Univ. of New South Wales)、河村昌伸(Angel life NAGOYA)、鬼塚哲郎(MASH 大阪):ゲイコミュニティと AIDS、第 16 回日本エイズ学会総会シンポジウム、名古屋、2002.11.29

学会発表(一般演題)

- 1.Onitsuka,T. Matsubara,A. Tsuji,H. Satoh,T. Kimura,H. Onizuka,N.Ichikawa,S.: Analysis on MASH-Osaka Project-the first HIV Prevention Intervention Project in Japan, the 6th International Congress on AIDS in the Asia and the Pacific, Melbourne, 2001.10.8
- 2.鬼塚哲郎、市川誠一、他:大阪地域における MSM への HIV/STD 予防啓発のニーズとプログラム、第 60 回日本公衆衛生学会総会、香川、2001.11.01
- 3.鬼塚哲郎、市川誠一、他:MASH 大阪・SWITCH2001 における臨時予防相談・検査を実施して、第 15 回日本エイズ学会総会、東京、2001.12.01

平成 14 年度 HIV 社会疫学研究班 MSM グループ
男性同性間における HIV 感染の動向と予防介入に関する疫学研究
MASH 大阪の予防介入プログラムの効果評価

木村博和(横浜市大・医・公衆衛生学)、市川誠一(神奈川県立衛生短期大学)、鬼塚哲郎(京都産業大学/MASH 大阪)、松原 新・辻 宏幸(MASH 大阪)、鬼塚直樹(UCSF-CAPS International Program)、日高庸晴(京都大学大学院医学研究科)

研究要旨

MASH大阪が実施した介入プログラムを評価する調査(SWITCH受検者調査、コンドームアウトリーチに関する街頭調査、クラブイベント参加者の継年調査)から以下の結果を得た。

1. SWITCH受検者の概要

2002年5月のGolden-SWITCHと8月のSummer-SWITCHの各採血会場において、受検者302人(150人、152人)に対して無記名の自記式質問紙調査を行った。分析対象者のMSMは301人、HIV/STI陽性者群(HIV、梅毒RPR、HBs抗原のいずれかが陽性)、STI既往者群(梅毒TPHAのみ、またはHBs抗体のみ陽性)、非感染者群(いずれの検査も陰性)の3群間を知識や意識、行動について比較、検討した。

(1)基本属性:5月と8月の両SWITCH受検者の年齢は20代49.0%、30代41.3%、40代以上7.4%、居住地は大阪69.0%、兵庫11.7%、京都7.7%(大阪を除く近畿23.3%)、その他の居住地7.7%であった。

(2)HIV抗体検査の受検状況:受検動機は5月、8月の受検者とも「自分も感染する可能性があるから」、「感染したかも、と不安になったことがあるから」、「ただ単に知りたいから」、「他の人に感染させる心配があるから」が多かった。過去の受検状況は、5月、8月とも初回が33~34%であった。

(3)各検査の陽性者割合:各検査の陽性者は、HIV抗体1.3%、梅毒RPR検査11.0%、梅毒TPHA検査19.4%、HBs抗原1.3%、HBs抗体19.6%であり、梅毒TPHAとHBs抗体の陽性者率は過去2回より高率であった。

(4)検査結果と知識、行動、意識との関連:HIV/STI陽性者群陽性者群で保健所の無料匿名検査の認知がやや高い傾向がみられたが、それ以外の項目の認知度は3群ともほぼ同様であった。性行動については、陽性者群の方が「ムードによって使わないことがある」が多かった。

2. コンドーム配布プログラムに関する大阪堂山地区における街頭質問紙調査

第1次調査を2002年8月、第2次調査を同年11、12月に実施した。アウトリーチは年間にコンドーム5万個配布の目標を設定し、それをMASH大阪のアウトリーチ隊は達成した。その結果、8月時点で堂山付近に集まるMSMのほぼ60%が受け取るという状況に達し、11月時点では70%に達した。コンドーム使用頻度の低い層の受取率が8月から11月までに上昇しており、また感染可能性を意識している層で上昇していた。これらの結果から、今回のアウトリーチは少なくともコンドームの使用に向けた環境の提示になったものと思われる。コンドーム使用率が向上したかについては、さらに継続した調査が必要である。

3. 大阪堂山地区のクラブイベント参加者に対するHIVに関する質問紙調査

大阪市北区堂山町のクラブイベント会場にてイベント参加者を対象にしたベースライン調査を1999年に実施して以来、1年毎に同会場で同様の手法での調査を継続した。ベースライン調査の分析結果から予防啓発のニーズを探り、啓発目標を設定し、その上で種々のプログラムを実施してきた。本調査は、その効果を評価するために継続実施してきたものである。回収数467件、内MSMは417件(回収数の89.3%)であった。

(1)コンドーム使用頻度(過去6カ月間):特定相手(n=214)と必ず使用45.3%、全く不使用23.8%、無回答6.1%で、不特定相手(n=142)と必ず使用56.3%、全く不使用8.5%、無回答9.2%であった。特定相手とのコンドーム常用率は1999年調査に比べて2002年調査では8%上昇していたが、「全く使わない」には大きな変化は見られなかった。この傾向は街頭調査でも同様であった。不特定相手とのコンドーム常用率は、1999年調査とは差が見られなかったが、2000年調査の48%に比べて2001年、2002年は10%程度上昇していた。

(2) HIV 抗体検査の受検経験(過去1年間):受検ありは 38.1%で、1999年調査の 19%に比べておよそ2倍の受検率に達した。受検施設の内訳は医院病院 32.4%、保健所 36.4%、Golden-SWITCH16.1% Summer-SWITCH11.9%、夜間休日検査 6.3%、NLGR2002 4.9%、その他 4.9%であった。SWITCH は HIV 検査受検行動を促進したことが示された。公的機関での検査受検の促進をはかることが今後の課題と思われる。

A. 背景と目的

大阪堂山地域における MSM 向け HIV 予防啓発プロジェクト(MASH 大阪)では、2000年から3年間計画で MSM を対象とした臨時 HIV/STI 検査・予防相談(SWITCH2000、SWITCH2000)を実施してきた。2002年は5月ゴールデンウィークには2日間開催(Golden-SWITCH)し、8月にも毎週末4回開催した(Summer-SWITCH)。

また、MASH 大阪では2001年からコンドーム環境の改善を目標にバー等に配布するアウトリーチを企画し、独自に開発したバー配布用のディスプレイを設置し、2002年は年間5万個を配布目標に展開してきた。さらに、これまでにポスター配布、STI 勉強会など様々な啓発介入プログラムを展開してきた。

本年度は、これらのプログラムを評価するために以下の調査を実施した。1) SWITCH 受検者へのアンケート調査、2)コンドーム配布プログラムに関する大阪堂山地区における街頭質問紙調査、3)大阪堂山地区のクラブイベント参加者に対する HIV に関する質問紙調査。

本報告では、これらの調査結果の概要を報告する。

B. 研究方法

1. SWITCH 受検者の概要(アンケート調査、検査結果から)

1) 調査時期、対象者

大阪堂山地域における MSM 向け HIV 予防啓発プロジェクト(MASH 大阪)では、2000年と2001年の過去2回、5月のゴールデンウィークに4日間(採血日は3日間)の臨時 HIV/STI 検査・予防相談(SWITCH2000、SWITCH2000)を実施してきた。しかし2002年は5月のゴールデンウィークに2日間だけ開催した Golden-SWITCH と、8月の毎週末4回開催した Summer-SWITCH と2通りの臨時 HIV/STI 検査・予防相談を実施した。

MASH 大阪では2002年5月と8月の受検者の特性を明らかにするため、受検会場において質問紙調査を行い、基本属性や受検行動、性行動などについ

て過去2回の SWITCH 受検者と比較、検討した。また、質問紙の回答と各検査の結果をリンクさせ、受検者の特性と検査結果との関連について検討した。

2) 調査方法

2002年5月3日の Golden-SWITCH と8月2、9、16、23日の Summer-SWITCH の各採血会場において、無記名の自記式質問紙調査を行った。受検者302人(150人、23人、33人、55人、41人)に対して、調査の趣旨と協力の依頼を口頭で説明し、質問紙を配布し、採血直後に回収した。質問は基本属性4問、受検行動4問、HIV/STI、抗体検査の情報5問、性行動や予防行動10問、予防に対する意識4問、MASH 大阪のプログラム3問などであった。質問紙には受検番号と同じ番号シールを貼付し、検査結果とリンクできるようにした。回収数は302人であったが、分析対象者は質問紙の回答(セクシャリティがゲイ(同性愛者)またはバイセクシャル、または男性とのセックスの経験あり)から MSM と判定した301人とした。

また受検者の特性と検査結果との関連について検討するため、受検者を5種類の検査結果から、HIV/STI 陽性者群(HIV、梅毒 RPR、HBs 抗原のいずれかが陽性)、STI 既往者群(梅毒 TPHA のみ、または HBs 抗体のみ陽性)、非感染者群(いずれの検査も陰性)の3群に分類し、3群間の知識や意識、行動について比較、検討した。関連の有無の判定には、3群間の割合や中央値を比較する際に統計学的検定を行い、有意確率(p値)が0.05未満の場合には関連ありと判定し、0.05以上0.10未満の場合は関連疑いと判定した。3群間の割合の比較時には χ^2 検定を、3群間の中央値の比較時には Kruskal-Wallis 検定を使い、集計と統計学的検定の実施には、パソコン用統計解析パッケージ HALBAU for Windows Ver5.4(現代数学社、京都、2001)を使用した。

2. コンドーム配布プログラムに関する大阪堂山地区における街頭質問紙調査報告

1) 調査日

第1次調査は、2002年8月10、17、24日(土)の

夜 10～11 時(ただし 17 日は夏祭時から)に、堂山地域のクラブイベント会場周辺の街頭にて実施。第 2 次調査は、同年 11 月 9 日、15 日、16 日、22 日、30 日、12 月 6 日、13 日の夜 10 時から翌朝 3 時までのクラブイベント参加者に会場内で実施した。

2) 配布・回収状況

第 1 次調査は、MSM 向けクラブイベントを開催する施設前の路上、MSM 向け HIV 予防啓発街頭イベントの会場とその周辺において、調査員が調査趣旨の説明とアンケート協力の依頼を口頭にて行い、同意した人に質問紙と筆記用具を配布し、回答した質問紙を回収した。3 日間の正確な配布数は不明。回収数は 331 件(108 件、136 件、87 件)。

第 2 次調査については以下の報告(3)を参照。

3) 分析対象数

第 1 次調査は、分析対象数 322 件(回収数の 92.7%)。質問紙の回答より MSM(「今までに男性とのセックス経験あり」または「セクシャリティがゲイまたはバイセクシャル」と回答)と判断したものを分析対象とした。

第 2 次調査については以下の 3 を参照。

3. 大阪堂山地区のクラブイベント参加者に対する HIV 関する質問紙調査報告

大阪市北区堂山町のクラブイベント会場にてイベント参加者を対象にしたベースライン調査を 1999 年 6-7 月に、実施して以来、1 年毎に同会場と同様の手法での調査を継続した。ベースライン調査の分析結果から阪の予防啓発のニーズを探り、啓発目標を設定し、その上で種々のプログラムを実施してきた。本調査は、その効果を評価するために継続実施してきたものである。

本年は、5 月連休と夏期に SWITCH を実施したこと、コンドーム配布アウトリーチを展開したことを考慮して、11 月-12 月に調査を実施した。

1) 調査日

2002 年 11 月 9 日、15 日、16 日、22 日、30 日、12 月 6 日、13 日の夜 10 時から翌朝 3 時。

2) 配布・回収状況

大阪堂山のクラブイベントの会場において、調査員が調査趣旨の説明とアンケート協力の依頼を口頭にて行い、同意のした人に質問紙と筆記用具を配布し、回答した質問紙を回収した。7 日間の正確な配布数は不明。回収数は 467 件(109 件、20 件、118 件、57 件、75 件、72 件、16 件)。

C. 結果

1. SWITCH 受検者の概要(アンケート調査、検査結果から)

1) 基本属性

5 月と 8 月の両 SWITCH 受検者の年齢は 20 代 49.0%、30 代 41.3、40 代以上 7.4%、居住地は大阪 69.0%、兵庫 11.7%、京都 7.7%(大阪を除く近畿 23.3%)、その他の居住地 7.7%であったが、5 月の受検者と 8 月の受検者を比較すると 8 月の方が年齢はやや高く、大阪、近畿の人が多かった。職業は会社員 49.0%、フリーター 11.3%、学生 10.7%、公務員・団体職員 10.7%であった。セクシャリティはゲイ(同性愛者) 92.7%、バイセクシャル 7.0%であった。5 月、8 月の受検者ともほぼ同様であった。

2) HIV 抗体検査の受検状況

SWITCH の情報源は、5 月の受検者では「フライヤー等」、「友人」、「ゲイ雑誌」、「インターネット」の順であり、8 月の受検者では「フライヤー等」、「友人」、「ゲイ雑誌」、「ゲイバー」とほぼ同様であったが、「フライヤー等」と「インターネット」の割合は 5 月と 8 月の SWITCH でかなり異なっていた。受検動機は 5 月、8 月の受検者とも「自分も感染する可能性があるから」、「感染したかも、と不安になったことがあるから」、「ただ単に知りたいから」、「他の人に感染させる心配があるから」が多かった(図 1)。受検回数は初回受検者が 33%、2 回目が 26%、3～5 回 32%であった。過去の受検状況は、5 月、8 月とも初回が 33～34%であったが、5 月は 1 年以内の受検経験者が 49%と最も多く、8 月は 1 年以上受検なしが 35%であった(図 2)。8 月の 4 回のうちでは第 3 週に初回、1 年以上受検なしの人が多かった。1 年以内に受検した人の受検場所では 2001 年の SWITCH が 48%と最も多く、以下保健所 34%、病院・医院 16%、夜間検査 12%の順であった。

3) 受検者の性行動

過去 6 カ月間に男性とセックスした人は 98%、男性とアナルセックスした人は 83%であった。8 月の受検者のうち、特定の相手とアナルセックスしたときにコンドームを使用した頻度は、「毎回使った」39%、「全く使わなかった」32%、その中間 24%であったが、その場限りの相手との使用頻度は、「毎回使った」40%、「全く使わなかった」14%、その中間 42%であった。

4) 各検査の陽性者割合

各検査の陽性者は、HIV 抗体 1.3%、梅毒 RPR 検査 11.0%、梅毒 TPHA 検査 19.4%、HBs 抗原 1.3%、

HBs 抗体 19.6%であり、梅毒 TPHA と HBs 抗体の陽性者は過去 2 回より高値であった(図 3)。梅毒検査陽性者のうち既往歴ありと回答した人は RPR 陽性者で 61%、TPHA 陽性者で 74%であった。また HBs 抗体陽性者のうち「既往歴あり・ワクチン接種歴なし」が 36%、「既往歴なし・接種歴あり」17%、「既往歴、接種歴ともになし」が 48%であった。

5) 検査結果と知識、行動、意識との関連

受検者を各検査結果から非感染者群、STI 既往者群、HIV・STI 陽性者群の 3 群に分類し、HIV・STI に関する情報や知識、性行動や予防行動、予防に対する意識や態度について比較することにより、検査結果との関連について検討した。知識や情報についてみると、陽性者群で保健所の無料匿名検査の認知がやや高い傾向がみられたが、それ以外の項目の認知度は 3 群ともほぼ同様であった(図 4)。性行動については、陽性者群の方が「ムードによって使わないことがある」が多かった(図 5)。

2. コンドーム配布プログラムに関する大阪堂山地区における街頭質問紙調査

MASH 大阪オリジナルコンドーム受取率は、堂山のゲイバーでは 8 月時点の 38.2%から 11 月時点の 48.0%、イベント・街頭では 37.3%から 38.1%、いずれかでは 64.6%から 69.1%であった。ゲイバーやイベント・街頭での配布で、8 月時点で 60%強の人がこのコンドームを手にしたことになる。また、ゲイバーでの入手は、8 月から 11 月までに 10%ほど上昇した。

コンドームの受取状況は、15-19 歳層でも 68.4%がいずれかの場所で受け取っており、他の年齢層もほぼ同程度の受取率であった。しかし 40 歳以上の年齢層では、11 月の受取率が低く、ゲイバーでの受取も 11 月では低調であった(表 1)。

商業系ハッテン場利用種類数では、非利用層に比べて利用層に受取率が高く、また出会い系サイト利用種類数でも同様の傾向が伺えた(表 2)。

コンドーム使用頻度でみると、「使用することが多い」「必ず使用する」層は 8 月時点では高い受取率であったが、11 月では低く、これに比べて、「全く使わない」、「使わないことが多い」層では 8 月より 11 月時点での受取率が高い状況であった。

HIV 感染の可能性について「絶対無い」「ほとんどない」の層は、8 月に比べて 11 月時点では受取率が低く、これに対して「十分ある」「五分五分」の層は高く

なっていた。特に「十分ある」の層は「いずれかで受け取った」が 17.1%、「ゲイバーで」が 12.4%、「イベント・街頭で」が 13.8%も高くなっていた。

3. 大阪堂山地区のクラブイベント参加者に対する HIV に関する質問紙調査

1) 分析対象者

分析対象数 417 件(回収数の 89.3%)。質問紙の回答より MSM(「今までに男性とのセックス経験あり」または「セクシャリティがゲイまたはバイセクシャル」と回答)と判断したものを分析対象とした。

2) 対象者の属性

年齢は 20 代前半 28.1%、20 代後半 32.6%、30 代前半 18.7%、30 代後半 10.8%。居住地は大阪府内 59.0%、大阪を除く近畿 25.9%、その他 14.1%。職業は会社員 46.3%、学生 17.3%、フリーター 12.0%、自営業 6.0%。セクシャリティはゲイ 84.7%、バイセクシャル 13.2%であった。

3) 施設利用状況

ゲイナイト 40.8%、商業系ハッテン場 43.9%(サウナ系 32.9%、マンション系 14.6%、BOX 系 10.3%)、野外系 7.4%、出会い系サイト 39.8%(PC 出会い系 26.6%、携帯出会い系 25.7%)であった。

4) 性行動(過去 6 カ月間)

男性とのセックス(フェラチオを含む) 88.0%、セックスの相手男性人数が 1 人 14.4%、2 人 7.9%、3 人 7.0%、4~5 人 11.6%、6~10 人 8.8%、11 人以上 4.9%であった。

アナルセックス 61.4%、アナルセックスの相手人数が 1 人 14.6%、2 人 7.4%、3 人 6.0%、4~5 人 6.3%、6~10 人 3.2%、11 人以上 1.9%であった。

5) コンドーム使用頻度(過去 6 カ月間)

特定相手(n=214)と必ず使用 45.3%、全く不使用 23.8%、無回答 6.1%で、不特定相手(n=142)と必ず使用 56.3%、全く不使用 8.5%、無回答 9.2%であった(図 6,7)。

特定相手とのコンドーム常用率は 1999 年調査に比べて 2002 年調査では 8%上昇していたが、「全く使わない」には大きな変化は見られなかった。この傾向は街頭調査でも同様であった。不特定相手とのコンドーム常用率は、1999 年調査とは差が見られなかったが、2000 年調査の 48%に比べて 2001 年、2002 年は 10%程度上昇していた。

6) コンドーム使用に関する意識

相手が望めば使う 32.9%(アナル経験者 33.3%)、

その場のムードで使わないことがある20.9%(同24.9%)、手元にあれば使う 42.4%(同 44.2%)であった。

7) MASH 大阪の配布するコンドームの受け取り経験(過去1年間)

受け取り経験あり 69.1%、堂山のゲイバーで 48.0%、クラブ・街頭で 38.1%、ミナミのゲイバーで 6.0%であった。

8) HIV 抗体検査の受検経験(過去1年間)

受検ありは 38.1%で、1999年調査の 19%に比べておよそ2倍の受検率に達した(図8)。受検施設の内訳は医院病院 32.4%、保健所 36.4%、Golden SWITCH 16.1%、Summer SWITCH 11.9%、夜間休日検査 6.3%、NLGR2002 4.9%、その他 4.9%であった(図9)。

SWITCHはHIV検査受検行動を促進したことが示された。公的機関での検査受検の促進をはかることが今後の課題と思われる。

9) 将来の感染可能性

絶対ない 9.8%、ほとんどない 24.9%、五分五分 27.3%、十分可能性がある 20.1%、分からない 17.7%であった。

D. 考察

1. SWITCH 受検者の概要

本年の SWITCH は 5 月に加えて 8 月にも実施した。5 月は受付日を 1 日、告知日を 2 日間、受検者の受付も 150 人に限定した。この点で昨年までの SWITCH とは異なる。また、8 月の SWITCH は、受検会場を北区保健センターとし、受付も金曜日夜刻からとした点で、5 月の SWITCH とは異なる。これらの変化は、過去 2 回の SWITCH における受検者の増加に対して受検者への医療的サービスの質の低下を防ぐことにあつた。また、北保健センターを会場にしたのは既存の公的検査機関との共同を意識したものであつた。

受検者の基本属性からは、本年の受検者層は過去 2 回とは大きく異なつていた。特に若い受検者層が少なく、また、初回受検者が 33%と過去の 2 年の SWITCH に比べて少なかつた。8 月の 4 回のうちでは第 3 週に初回、1 年以上受検なしの人が多かつた。

各検査の陽性者は、HIV 抗体が 1.3%で過去 2 年に比べて低かつたが、梅毒 RPR 検査 11.0%、梅毒 TPHA 検査 19.4%、HBs 抗原 1.3%、HBs 抗体

19.6%であり、梅毒 TPHA と HBs 抗体の陽性者は過去 2 回より高値であつたことから、感染リスクの低い層の受検であつたとは言いがたい。性行動については、HIV/STI 検査陽性者群の方が「ムードによって使わないことがある」が多く、この点での行動変容への介入が必要と思われた。

2. コンドーム配布プログラムに関する大阪堂山地区における街頭質問紙調査

MASH 大阪オリジナルコンドームは、8 月時点で 60%強の人がこのコンドームを手にしていて、また、ゲイバーでの入手は、8 月から 11 月までに 10%ほど上昇していた。15-19 歳層でも 68.4%がいずれかの場所で受け取っており、アウトリーチは若年層にも届いていることが示された。

アウトリーチは年間に 5 万個配布の目標を設定して実施し、その目標を MASH 大阪のアウトリーチ隊は達成した。その結果、8 月時点で堂山付近に集まる MSM のほぼ 60%が受け取るという状況に達し、11 月時点では 70%に達していた。受け取る層をみると、コンドーム使用頻度の低い層の受取率が 8 月から 11 月まで上昇しており、また感染可能性を意識している層で上昇していた。これらの結果から、今回のアウトリーチは少なくともコンドームの使用に向けた環境の提示になつたものと思われる。コンドーム使用率が向上したかについては、さらに継続した調査が必要である。

3. 大阪堂山地区のクラブイベント参加者に対する HIV 関する質問紙調査

特定相手とのコンドーム常用率は 1999 年調査に比べて 2002 年調査では 8%上昇していたが、「全く使わない」には大きな変化は見られなかつた。この傾向は街頭調査でも同様であつた。不特定相手とのコンドーム常用率は、1999 年調査とは差が見られなかつたが、2000 年調査の 48%に比べて 2001 年、2002 年は 10%程度上昇していた。これらの変化が MASH 大阪の介入プログラムによるコンドーム使用の行動変容であつたかについては、さらに詳細な分析が必要である。また、参加者が一定していないクラブイベント調査の限界もあり、今後はコホート調査など方法を検討することも必要と考える。

過去 1 年間の HIV 抗体検査経験者は 1999 年のベースライン調査に比べておよそ 2 倍に達した。SWITCH は HIV 検査受検行動を促進したことが示さ

れた。公的機関での検査受検の促進をはかることが今後の課題と思われる。

E. 結論

1. SWITCH 受検者の概要

本年の SWITCH 受検者層は過去 2 年の SWITCH とは大きく異なっていた。特に若い受検者層が少なく、また、初回受検者が 33%と過去の 2 年の SWITCH に比べて少なかった。

各検査の陽性者は、HIV 抗体が 1.3%で過去 2 年に比べて低かったが、梅毒 RPR 検査 11.0%、梅毒 TPHA 検査 19.4%、HBs 抗原 1.3%、HBs 抗体 19.6%であり、梅毒 TPHA と HBs 抗体の陽性者は過去 2 回より高値であったことから、感染リスクの低い層の受検であったと言いがたい。性行動については、HIV/STI 検査陽性者群の方が「ムードによって使わないことがある」が多く、この点での行動変容への介入が必要と思われた。

2. コンドーム配布プログラムに関する大阪堂山地区における街頭質問紙調査

アウトリーチは年間に 5 万個配布の目標を設定して実施し、その目標を MASH 大阪のアウトリーチ隊は達成した。その結果、8 月時点で堂山付近に集まる MSM のほぼ 60%が受け取るという状況に達し、11 月時点では 70%に達していた。受取る層をみると、コンドーム使用頻度の低い層の受取率が 8 月から 11 月まで上昇しており、また感染可能性を意識している層で上昇していた。これらの結果から、今回のアウトリーチは少なくともコンドームの使用に向けた環境の提示になったものと思われる。コンドーム使用率が向上したかについては、さらに継続した調査が必要である。

3. 大阪堂山地区のクラブイベント参加者に対する HIV 関する質問紙調査

特定相手とのコンドーム常用率は 1999 年調査に比べて 2002 年調査では 8%上昇していたが、「全く使わない」には大きな変化は見られなかった。この傾向は街頭調査でも同様であった。不特定相手とのコンドーム常用率は、1999 年調査とは差が見られなかったが、2000 年調査の 48%に比べて 2001 年、2002 年は 10%程度上昇していた。これらの変化が MASH 大阪の介入プログラムによるコンドーム使用の行動変容であったかについては、さらに詳細な分析が必要である。

過去 1 年間の HIV 抗体検査経験者は 1999 年のベースライン調査に比べておよそ 2 倍に達した。

SWITCH は HIV 検査受検行動を促進したことが示された。

F. 研究発表

論文発表

1. 橋本修二、福富和夫、山口拓洋、松山 裕、中村好一、木村博和、市川誠一、木原正博：HIV 感染者数と AIDS 患者数のシステム分析による中長期展望の試み、日本エイズ学会誌、2002.02、4(1)、8-16

2. 市川誠一、木原正博、木原雅子、木村博和：HIV 感染症疫学の現状、化学療法の領域、2002.4、18(4)、495-501

3. 山口拓洋、橋本修二、川戸美由紀、中村好一、木村博和、市川誠一、松山 裕、木原正博、白阪琢磨：エイズ治療の拠点病院における HIV/AIDS の受療者数、日本エイズ学会誌、2002.08、4(3)、91-95

学会発表

1. 木村博和、市川誠一、鬼塚哲郎：大阪の MSM 向け臨時 HIV/STI 予防相談・検査の 2 年目の受検者の特性、日本公衆衛生学会、2002 年 10 月、埼玉

2. 市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原 新、日高庸晴、鬼塚直樹、木原正博：大阪地域の MSM における HIV・STI 感染の予防啓発介入研究 3. 第 3 次質問票調査(2001 年調査)による予防介入の評価、第 16 回日本エイズ学会学術集会、2002 年 11 月、名古屋

3. 佐藤未光、井戸田一朗、岡崎一裕、鬼塚直樹、木村博和、市川誠一：東京地域の MSM に向けた HIV/STI 感染予防活動、第 16 回日本エイズ学会学術集会、2002 年 11 月、名古屋

4. 川戸美由紀、橋本修二、山口拓洋、中村好一、木村博和、市川誠一、松山 裕、木原正博、白阪琢磨：拠点病院における HIV/AIDS 受療者数の推移、第 16 回日本エイズ学会学術集会、2002 年 11 月、名古屋